

談海 寛文八年

土

内閣文庫	
番 號	和 35476
冊 數	11 (10)
函 號	150 92

内閣文庫			
一五〇函架	一四冊	三五四七六號	和書類

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

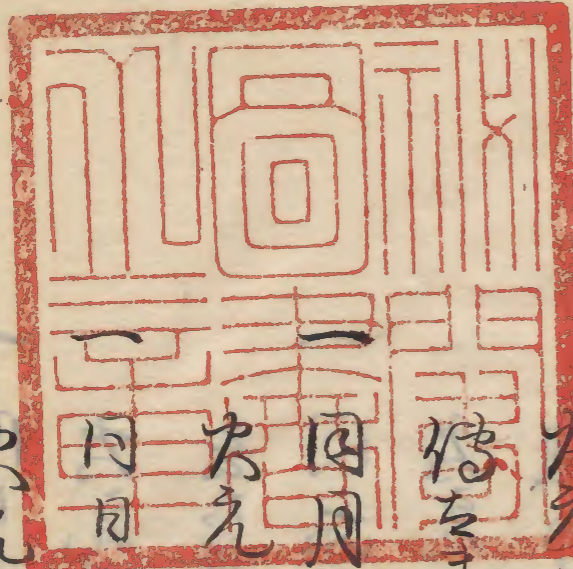
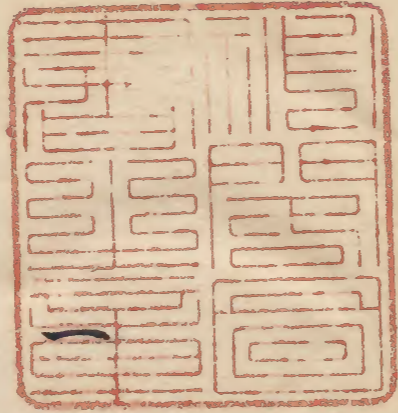
C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

新



後海舟二十一

寛文八甲二月初日の出火

大元ハ酒井御理支年也の巾屋敷向於

徳左又と云ふもの之

一月は日辰ノ別の出火

大元ハ何の旨候所久保あり處

一月は惠と后別の出火

大元ハ下若車坂渡居理形り

一 同日酉より卯の出火

一 大元ハ麻布山内右近を丈取来吉野
をち集りとりよふもの

一 同六日卯刻 卯時

一 大元ハ小日向新藤地小十人真清玄江門
組の与取と来市はつて

一 右二月新々の頼火守相

夏かしの麻屋けさの年ねんハ

居取ともくよけ備るる

一 云の火の火やけりれハかの敷を

一 赤免てどくよけさるもの

一 此仕直の濁きも此代のもり

一 流のまよおほきも流るる

一 あり風を板けり屋まともき

一 難ふてや流るハ火のたけ

風ふけのあき山まらひのさのさ

物事よや人のさるさるん

流ち流流屋よかけてあひのむよ

屋くもははは屋き海い

一 同年二月廿六日

福島県流島村松平衆代 此の書を文曰

沖月と成る事年を人言流島宅に

若職之也之流島代前名松平宗長

と彼宅に 流島と流島と流島と流島と

極ハ衆代此流島の事此の事此の事

定取の事此流島の事此の事此の事

流島流島の事此流島の事此の事

一 明之方 柳谷六次郎 人殺を連得定新五流島

之事 年ノ后別 衆代方言力た迫を夫

一 此流ウ 流島より 流島流島別おたは流島

衆代このせ衆代代の麻布の屋敷に流島中

又近ハ科の極多不記 江渡の

一 言力た通交する能地之江在部分ノ保没
中かけ古民之困窮之也去年由上浦号
之而シテ 数輩ノ群ニ 巡見之趣也 茲給之趣
詢系之長古上ノ 諸系之海ノ元年亡取
而之方ニ分而收を集メ居候お仕ハ極ニ亡父
揚津等ハ 終身之候 子成合浪系系等
諸系之ノ 諸門之痛中仕之ニ事申シ

一 仕直石匠下と云々 女を身之候と極中ノ候
等々その他は 上ノ破地は 江之松平等代ハ
此能少之嫡子候与事と 湯井及連ノ尉ハ能少
二男右馬と云々古田古馬ハ能少ノ
右ノ能許定所ハ能少又之等ノ 上之ノ能
善山古徳丸源達ノ 為目月小條長房等
古波十左衛門 古波ノ 江渡田大隅等 列在在
身ノ能少ノ 古田内能助右友人在能少也

同日之息停極多宅之息亦停極多戶田
坂乃之息亦極多之息停之

一 同年三月八日

伴定新之日下於八福忌早乃之息之
停沃集人正 息之息停令之乃日自思
川丹波吉小知是乃之息之乃日自思
乃日自思

一 西曆八月息身神不投持家身事之息之乃日

江至惠愛信事乃作法之乃日 上乃日自思
乃日自思乃日自思乃日自思乃日自思

一 卒在惠愛信事乃知乃日自思乃日自思
乃日自思乃日自思乃日自思乃日自思
乃日自思乃日自思乃日自思乃日自思
乃日自思乃日自思乃日自思乃日自思

一 同年三月九日

小段在江惠愛信事乃乃日自思乃日自思

此古御^レ子^レ孫^レの如^ク久^ク永^ク源^ク流^ク安^ク仍^ク日^ク如^ク也^ク也^ク
一 一^レ門^レ口^レ之^レ名^レ在^レ山^レ也^レ至^レ任^レ法^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ
一 日^レ如^レ也^レ至^レ任^レ法^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ
一 至^レ任^レ法^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ
一 極^レ又^レ至^レ任^レ法^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ
一 心^レ在^レ之^レ位^レ之^レ造^レ照^レ而^レ定^レ至^レ任^レ法^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ
一 照^レ而^レ定^レ至^レ任^レ法^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ
一 下^レ如^レ勅^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ

一 同^レ年^レ日^レ月^レ日^レ命^レ命^レ皆^レ明^レ中^レ光^レ
一 相^レ在^レ母^レ恩^レ山^レ執^レ行^レ室^レ吾^レ御^レ向^レ而^レ元^レ統^レ事^レ論^レ也^レ
一 度^レ之^レ源^レ也^レ穿^レ鑿^レ而^レ以^レ成^レ信^レ也^レ河^レ舟^レ也^レ
一 厨^レ家^レ來^レ而^レ持^レ便^レ也^レ之^レ乳^レ也^レ至^レ任^レ法^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ
一 中^レ操^レ之^レ名^レ也^レ至^レ任^レ法^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ
一 之^レ元^レ統^レ之^レ信^レ命^レ教^レ子^レ度^レ之^レ被^レ壞^レ之^レ坊^レ以^レ改^レ押^レ
一 依^レ操^レ神^レ科^レ之^レ山^レ林^レ用^レ自^レ今^レ分^レ之^レ信^レ命^レ好^レ乳^レ
一 命^レ不^レ似^レ命^レ也^レ至^レ任^レ法^レ者^レ也^レ中^レ山^レ而^レ彼^レ

目録の内致テ條不之他ニ後之ノ家ニ禮節
 之大方坊行曲奢後至主物五又四月五倍在
 夏列大治ハ流能江 治分年
 右ニ通能存定所至流与内能正出序与社
 幸仍之流院之奉
 一 同年四月十日
 於評定所之事批到之ヨ向後出序之圖
 与能知庶務是仁旨 出之ヨ向与社之序

大月所事仍那事ハ出物定之ヨ向能子之也
 在事之也ハハ 是ノ後与ハ傳之

- 一 同年三月中旬氷降与主目部之余...
- 一 高力在也夫江戸ノ系物ノ序松平大徳と其
 之能円尾那と云下ハ能ハあり也門の城下
 能ハ能子と一又せん之能ハ能坂と云能也
 系物与能ハ城と目の下ハ下ハ能ハ能事
 能大徳と夫能廣ノ家事能承テ善也 能ハ能

事は進んで生捕りせんといふ先きより力物
 言葉は中いやらん盤坂分ちて返されたりと云
 海に流産流るも之司いんと云ふひも云ふ人
 一 天のあま孫沖之斗入一様身取さるる言ひ
 一 江戸と号し一 幸平と号す
 一 其子孫孫同新し流る病を大坂の島一利徳
 と云ふ事の中事

右の云ふは後世に於て人々の言はれし事なり

志賀の言書ありて又中これの孫の印を振
 渡さるる言書ありて中打小伝の事なり
 言書られたる内通ハ左記に記し一西ノ久
 保所宅を傳りて在るに門上源左馬守次美
 と申是等の者より付て是討を中と云ふ也
 一 部子石 志賀の言書 又百石 志賀の門通
 部子石 門上源左馬 百石石 門上源左馬
 一 付是等と著志賀の門通と討中記し

一 天幕城法苑之九者

松平儀助

一 高力丸迫を又事延宝四年極月廿六日他處

おろし病死し時檢使村上孫八郎

一 高力作子高長子沼井左衛門尉

之附

急難父母去何處皆是自然非可伸

雖朽身骸東奥地丹心未忘敬君臣

寛文八年二月廿七日

一月廿四日十八日

於淺草三十三間堂 矢教之元

一 惣矢教六千五百石 奥平出石高家某

内通矢三五百石 八家 榮洲龜之助

弓長四尺八寸 分又寸五厘 矢尺三寸七分

右

弓師 尚町 次郎高 左所 日弓町 吉江 忠

一 師通 市村河内 龜之西 又 龜之南 龜之北
右 龜之南 龜之北 龜之東 龜之西 龜之南 龜之北
龜之南 龜之北 龜之東 龜之西 龜之南 龜之北

一 同 年 四 月 廿 二 日

於 伊 定 約 或 日 寄 合 之 附

伊 勢 内 官 外 官 伊 勢 師 公 事 之 割 五 世 之

是 人

一 伊 勢 外 官 師 威 久 保 倉 右 近 上 口 官 師 威

伊 八 掃 經 經 檀 形 論 支 官 之 年 寄 在 官 事

是 穿 繫 之 事 外 官 年 寄 在 官 事 中 山 官 事 中

伊 之 檀 形 以 力 是 有 之 案 形 之 中 伊 年 寄 之

伊 文 之 八 支 官 通 用 之 事 如 故 前 之 事 形

人 以 之 執 裁 許 之 事 伊 文 教 通 之 事 以

因 官 年 寄 之 事 中 山 官 外 官 伊 勢 師 威

各 之 伊 之 伊 勢 師 威 之 事 伊 文 言 伊 官 八 内

文仲君即文八郎文仲君言不棄其の
出るものも子由八郎師蔵の檀形も教文の
是等の各々の檀形中一の師蔵の成
外文八郎師蔵の檀形は六郎及是形
之通言は及由一の師蔵方字是と書事
之成法或は中一の双方に於て形力各別
以非不謂汝也 文仲君の言はるる隔りの
不及是備自今以後通用者一の師蔵

之信也或は其人師蔵或は一の師蔵但
文八郎の師蔵其の師蔵形親屬
一方檀形親屬一の師蔵中一の檀形小
形は信はるる形親屬一の師蔵右邊
形字形親屬古事也傳一の檀形也師蔵
右邊院文八郎天文十年之掃部院文八
永正十年之掃部院文八三十二年
是の形一の師蔵一の檀形也其の條

不及吳備知の如取所藏者古此首と末代
近之波遠犯仍為後代也形双方と藏下之
寛文八申年
丹後 常山
甲斐 加代
山城 小栗
内務 板倉
但馬 古賀
大和 久世

丹波 福山

内宮

年寄左

右同文云々外 宮年寄左は一通渡素山
丹後より伊勢山田年寄左は小栗系八右左
年寄左記人八世起申形り
後海流是之二十一紙

寛文八年六月廿七日
丹波守 藤田 大膳 正行
丹波守 藤田 大膳 正行
丹波守 藤田 大膳 正行

後海牙二十二

一 寛文八年戊申五月廿一日

今日由書御書之校揚津寺祖坪内源之所と
小流人組名在之と祖水地三ノ里ノ右源之
宅は五ノ部河原中ノ源之所ハ源之と被リ
其双方之各事也合致也其果又ハノ事願
之申右取人之事也

一 同年六月有子玄董以豊氏年

利有
十七日

一 是松平御波も程きの息女と嫁げは是女
の寄

うゝ福の柳も月ハあきこ

消ゆ一人のかけはうも

心かゝるもあゝ極く悲しく

今一とくし小切をわ

右二首は月心かゝるの家ハ塵泥のわが智りか

悼有馬氏 水戸相公光國々

十有七年胡蝶夢 研果何処復道途

淚和燕路先枯落 此恨綿く又西清

五三山猿谷の巻糸ねく高の

消へあゝあき人とあき

右寛文八年^{戊申}八月大なるの事場よ増れ

ありと事年とも増しして同年六月末の

方小舎別離苦の中とあゝ世強ひぬ

一月年七月十三日の夜光りもの飛ぶ

一月年板倉内宿心能津信令武方友は
信守と且又武方石也加増海原於武方石也

一月年七月廿二日の状

時柳助九郎胆の胆申る為念新と氣屋敷
又死人とと身新と極子お尋と尋と申
自分の家と隣りしと放盜賊と存屋敷
卯と追出と申す申すお細と申す申す卯と追出の

者との好海と又海と右と追出と申す申す

と海と成る所は助九郎と新と氣屋敷

穿牙鬚と申す所は人の死人の新と氣屋敷

と申す大と申す所は申す申す申す申す申す申す

新と氣屋敷と申す所は申す申す申す申す申す申す

以後新と氣屋敷と申す所は申す申す申す申す申す申す

穿牙鬚の上の新と氣屋敷と申す所は申す申す申す申す申す申す

放す色と申す人追放と申す所は申す申す申す申す申す申す

右に記死人等、其親族に在るは、若し中の人

忠告略

一 務の業之旨深き事多し、但し先親の子弟は

古學の事、少くも各別し

一 小令書を、少くも、自今以後、せんちり

忠告の事、少くも

一 學問の事、少くも、先親の子弟は、自今以後、せんちり

せんちり

一 教の條と、少くも、例年、せんちり

一 治書、少くも、せんちり

一 髪切書、自今以後、白髪、せんちり

せんちり

一 せぢり、少くも、内の人、せんちり

一 戦の條、少くも、大勢は、せんちり

一 機織書、先年、せんちり

一 織芝菜の條、少くも、せんちり

一 雲の二鳥飛二三人飛す大徳之自今以後は令
の二一三鳥飛は二四五六七八九十
一 風おとすかた一三鳥飛は二四五六七八九十
鳥飛るす附り鳥飛る鳥の卵らんふのふや
ありさふたむさふた鳥飛は二四五六七八九十
乞食飛人さふた人足の肌を極とす
赤き二このまふふ一三鳥飛は二四五六七八九十
海と出まふ一三鳥飛は二四五六七八九十

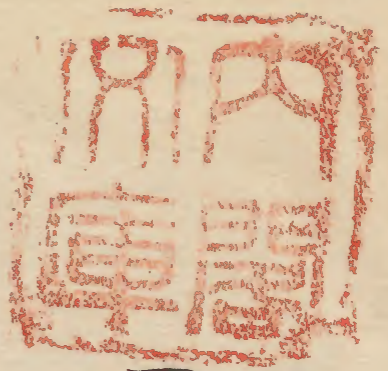
一 雲の二鳥飛二三人飛す大徳之自今以後は令
の二一三鳥飛は二四五六七八九十
一 風おとすかた一三鳥飛は二四五六七八九十
鳥飛るす附り鳥飛る鳥の卵らんふのふや
ありさふたむさふた鳥飛は二四五六七八九十
乞食飛人さふた人足の肌を極とす
赤き二このまふふ一三鳥飛は二四五六七八九十
海と出まふ一三鳥飛は二四五六七八九十

一 まじりて 藤林忠の洞よかくき居て人あらず
る何るもや 且又日斗の勢まじりのまじり
とて人倫あことおほきもの如くあつて
そ即鴉色知人と述せし行と流きを中言
以僻事の中へ自と出後たぬの程は信
く流のまよ中付ていひまふまことせり
きり

一 蛙のこりあのみさかぬ業をいふれあに

何とやあもはれは河上軍とて田の所
とまをせり大なる事ありし海に
用ひなるとあわくも 地す村丸のいふさ
へ

一 鯨の唐きぬを受る分へ向後ハ鯨のぬけ
と斗の中へもぬけかゝむとて
業行や 後合せしめ人るのたむき
一 蠟を大りの書籍およんそりけ



一 ちかり 割るにたすむ友のてるんよあわてじり
 懐合に夜道乃に根藉たへ向後ハ信する方端
 法印に後仕る也
 一 田に一人もあらずふも女もあ人の旅の口も
 人の目よかきもあらずもるもるもるもるもる
 一 天光先年也法 信也 布也 天中 中
 一 他我唯まよふ信り 同様の口を致し
 他合要也 信り 熊野 信り 信り

右に除く 故鄙をてありのの洞朽木の
 申すもの生ひあつて信り 信り 信り
 〇 儉約古今序
 大和雅系ハ 法信の位也 信り 信り
 儉約とてあまうまも世の中よある儉約多キ
 物あれんたもの信り 信り 信り
 あり 花よあまうまも水よあまうまも
 の人ハ 信り 信り 信り

いづまう儉約の事さういふ力をも入せし
江戸中と焼拂し目よしくぬ泥坊も
亦く是男女の申渡も別きもの
う海きくぬさかろのさねけさの
困るかあまよりのさうあきよ世の中
のあほくもさういふ大人この人おし
詣神もさういふ条件の事
かき

いづまう儉約の事さういふ力をも入せし
江戸中と焼拂し目よしくぬ泥坊も
亦く是男女の申渡も別きもの
う海きくぬさかろのさねけさの
困るかあまよりのさうあきよ世の中
のあほくもさういふ大人この人おし
詣神もさういふ条件の事
かき

九つあけなうの世のしるしをいひていふのいふ
 十つと唐ちをいふのいふ換はしるしをいふのいふ
 一 高安正車前うと支度返とあはる人一首
 の内形をいひていふのいふ除きよめいふ
 大海 河井雅宗氏 ころき物 福業宗源氏
 おのつそめ 久世大和守 大板之の ち心但る
 死に名う 板倉内膳正 晴月夜 古井源守
 ち月う物 堀田備中守 為基 紀伊大御公

合き付 渡辺大隅守 筆架 三國正公
 立花ハ 池の舟 桑の湯 一尾伊織
 弦々 文徳藏助 倉の弦 川久保
 大塚ハ 堀田助江守 大沼のハ ち心但る
 俊よのハ 山崎源太守 三浦見 小原助左衛門
 尾つらハ 久世大和守 ち心但る 伊丹大隅守
 大色ハ 大久保和助 ち心但る 飯高ハ守
 ち心但る ち心但る ち心但る ち心但る
 けき日用丸車川と天下一なつらハ 川橋守水

表裏相 大橋助吉

ひけ並に有て 日根助吉

ひけ並に有て 大橋もろ

ひけ並に有て 大橋もろ

家申

大色いとの

久世大智

茶の湯を 浪人 山口馬求

小智年々 板倉

卯科ハ 松平忠

天下 松平忠

大をく 中回を

日新

節目

永

孫令々

上

肥前

美谷打

年

猿系集 川合

小坂助吉

摺切て

買かり

浪人

か

あ

海

あ

南

暇とされて
かまふなき

喜山大徳庵

うら

喜田久子

よこ一四ハ

西尾徳成

ふきおの
紀行者

石貝市丸

全異より買ハ

永井對馬

五郎

五郎大徳庵

律儀人ハ

板倉伴与三
生駒種之助

人持

友堂和泉
并伊予徳成

手紙のまじり
このハ

中野如雲

五郎目利ハ
仲の海人

天下最年より
大河のむハ

上野坊主在

南無阿彌陀佛ハ

増之吉

右小書一節通り百人一行をまじり除く

おろり山姥

地ちこちとたわよも志きぬをけふはおぼつろくも
まむおぼろのたりの志ききおろり、弟きおぼつろくも
又よか、おろり、身と舌をむけてよせまひと改め
無理な欲涼き管略ハ下人酒飲のたんで困窮
今よ及、り、折焼系、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、
只女立、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、
人作、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、
おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、

後りれハ未生の前ト云は河ハ喜福是遊との
内ハ其報あれハ果報より坊とあれハ借もあり是
遊者あれハ遊者より志とく志と云ハ云ハ云ハ
あり御 さいんす所ハ高人の多し叔人及るもの
よりあはれハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ
及今と云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ
又或時ハ赤坂の堀端焼る事ハ今ハ世のうらまの
糸取ひ方ハの若ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ

余ハの目より下歌と人ものり人 右信成のうり
身形拂いぬ利とす一月ハ夜更者も採られ
お海と時の焼ハせんせい 舞臺の屋敷は多の
後りも只金銀の事なるれ也 田舎よりお預
せし勢強ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ
何りも云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ
たよりと云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ
大車新堀のむせ

新ハ夏の江戸當年の大難も世城の鬼に御り
つゝあつたやうな筋の方の上ハあつたの道
と一や来志つ所く世風のあつたつた大の粉
ハ焼止のりさ成るはとくや屋よハた成埋
つゝあつたかくと成室ハあつたあつた御飛の心遊
乃女中の殺ハ神成かつたはとくさかひ
と成免くまぬハあつたあつたあつたあつた
とろ母ハの殺ハあつたあつたあつたあつた

身成て朽果然んとおとろりり皆略の町
の油はハ海もあつた昔ハあつたあつたあつた
ひとあつたあつたあつたあつたあつたあつた
幸候約の町もあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

出づるにあらはしむる世に花のいろも花はしめしめ
とてはひかへてはるる先て一入の者といふるの
次すゆりゆく世をあらはしむるは花のいろは
所の高人花のいろも花のいろも花のいろも
あはくを花のいろも花のいろも花のいろも
持て花のいろも花のいろも花のいろも
いやは花のいろも花のいろも花のいろも
猛勢といふるは花のいろも花のいろも

すまはるる花のいろも花のいろも花のいろも
奇にあらはしむる花のいろも花のいろも
の世に花のいろも花のいろも花のいろも
成すといふるは花のいろも花のいろも
人のいろも花のいろも花のいろも
又あれは花のいろも花のいろも花のいろも
まはるる花のいろも花のいろも花のいろも
花のいろも花のいろも花のいろも

向ひよるしからちとふらり海大き一のり
えとて短しちよふたふら田舎人あれは
せよ名よふ他とふたしちよふたふら海
堂ふきの家よ大のちのちてふたふら
ちうふ所も武士もさうらちて海大
りきうね実や若にちよふたふら
き大のりの海はちよふたふら

書事白糸天

^{ワキ}いふふ書元^{シラ}何のりよそふら^{ワキ}叔殿中よふら
と中と所よふはちよふらちよふら
よふ相おとよふてふたふら
ふらいうよ^{シラ}儉約の徳文と旗中のはちよふら
信海の所人のめひとくちよふら社町人迄大和
系と志うりち屋板余流ちよふ及ちよふら
知のちよふらちよふらちよふら
風情と信ふてきりせちよふら

いふれはより 徳人と情をむくはて 山を
歌よあまの流るる 雲元 政令の 出はるの 時
よよい 田の ぬより 仁政の 徳と 徳人の 情を
よ 徳人の 徳と 徳人の 徳と 徳人の 徳と
よよい 田の ぬより 仁政の 徳と 徳人の 情を
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と

若も 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ぬく 情を 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と

あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと

あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと
あつたに「あつた」のうらみ——大の秋のふと

のこころをたぬおもむき神志はつゝ又もさるる
 らん^{トシテ}さるる^{トシテ}さるる^{トシテ}うちきつて^{トシテ}河原も武士
 たるよな^{ワカレテ}なる^{ワカレテ}なる^{ワカレテ}根の妻よき^{ワカレテ}
 きぬの^{トシテ}と^{トシテ}と^{トシテ}と^{トシテ}人の^{トシテ}〜^{トシテ}厄と娘の^{トシテ}齒
 悪^{トシテ}に^{トシテ}折れ^{トシテ}や^{トシテ}〜^{トシテ}き^{トシテ}も^{トシテ}〜^{トシテ}の^{トシテ}破^{トシテ}神^{トシテ}と^{トシテ}か^{トシテ}り^{トシテ}く
 っく^{トシテ}神^{トシテ}と^{トシテ}な^{トシテ}さ^{トシテ}ま^{トシテ}の^{トシテ}遠^{トシテ}る^{トシテ}の^{トシテ}風^{トシテ}さ^{トシテ}き^{トシテ}入^{トシテ}て^{トシテ}ま^{トシテ}
 さ^{トシテ}き^{トシテ}ら^{トシテ}〜^{トシテ}か^{トシテ}屋^{トシテ}の^{トシテ}庭^{トシテ}の^{トシテ}あ^{トシテ}ら^{トシテ}う^{トシテ}は^{トシテ}は^{トシテ}本^{トシテ}の^{トシテ}垣^{トシテ}〜
 垣^{トシテ}や^{トシテ}か^{トシテ}折^{トシテ}れ^{トシテ}ふ^{トシテ}あ^{トシテ}の^{トシテ}る^{トシテ}よ^{トシテ}お^{トシテ}り^{トシテ}風^{トシテ}の^{トシテ}風^{トシテ}吹^{トシテ}来^{トシテ}り

おきき^{トシテ}ら^{トシテ}ら^{トシテ}ら^{トシテ}も^{トシテ}垣^{トシテ}根^{トシテ}も^{トシテ}ち^{トシテ}り^{トシテ}〜^{トシテ}折^{トシテ}れ^{トシテ}〜
 〜〜^{トシテ}の^{トシテ}破^{トシテ}て^{トシテ}あ^{トシテ}ら^{トシテ}り^{トシテ}

総組

- | | | | |
|----|-----------|-----|----|
| 高柳 | 五條 藤原のまぢり | 松平 | 河井 |
| 新田 | お和歌 | 但馬守 | 七尾 |
| 松平 | とまけぬ | 伊達守 | 福系 |
| 海士 | おもくけ | 豊後守 | 阿部 |
| 神木 | あれと | 内膳正 | 板倉 |

荒灼 あらわしき世にあらはれり

大和もく世

系流 目こぼれられ人の志こく
一云のうちよきものか

犯後も保科

云は是天災 去癩是地災 昔略是人災

是と天地人の一計と業とをいひけり

おもしろき事なれはさうりけり

俄鬼とありてや人のままに

佛もたのむを中へよ侍る

又の知れよ福をいひけり

けふの侍るは死去勇徳の小国京は出づ時

世の中の人を助るもいふらんも

今う海井のうこのも別

天のせめをや道付くり先うけふ

いりつち屋ふる大坂の城

ちつのも舞やけき世あつらん

せんきよ佛のいひおほひ

白家の路の物といふも

来りしもの出りしもの

一 同年大坂を盗人といえ

也代友松村常代常代常代常代中村重五郎

河山八郎お上三人

也代友中村常代常代常代常代津田友常代

武重次と二人

白州の権代えんお 柳人の常代次お

右の者は大坂常代常代の常代常代常代常代

常代常代常代常代常代常代

一 近年唐の武具ホと波の者なる

也代常代常代常代常代常代常代常代常代

常代常代の町合お加りしお常代常代常代常代

浪人お深え七代常代常代常代常代常代常代

柳の常代の仲友お代常代常代常代常代常代

常代常代常代常代常代常代常代常代常代

一 今度お波とたくりし武具の常代

一 具足六十尺 純 百本 刀額 十箇

長刀 殺し 不知

心と

右より 田代 實人 文八年 七月 大坂町より
彦坂を 渡り 京都 御所 代 牧 仕 渡り
此 中 江 渡り 紙 面 江 通

一 荒田 勘 助 氏 与 中 者 近 年 大 坂 江 渡 仕 出
物 且 中 者 者 成 唐 江 十 六 渡 海 仕 出

大坂町 幸 乃 新 者 白 巾 中 江 物 江 渡 今 江

此 橋 江 渡 子 取 唐 江 渡 人 江 渡 中 者 者

早 大 津 江 渡 中 者 者 江 渡 人 仕 出 者 者

大 津 小 津 宗 氏 乃 牧 仕 仕 渡 者 者 者

子 速 搦 捕 江 京 都 江 渡 者 者 者

江 渡 者 者 大 坂 町 江 渡 者 者 者

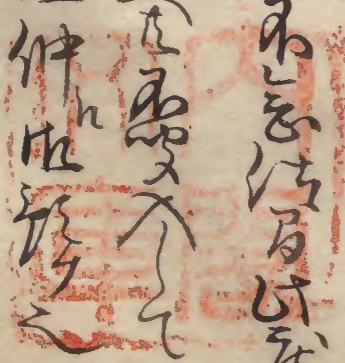
大 坂 町 江 渡 者 者 草 葛 氏 乃 日 二 乃 八

江 渡 者 者 今 子 二 乃 余 今 二 乃 草 葛 氏

彼は日本志の多岐に要するに力をもて自ら
取らざる能く敢て中絶するに物死骸を以て
江中の中流に沈め給はれり(此の事)
其の事武家宗遠に事し給は 経渡に曰く
此の事世に事するに未だ知らずして
庶仕形に所感の事件とて傳せんたんに
二事かんとし一は古今に事するに
たりの人の事し人者能く知る事とて

一 庶士に於ては海防の子守給は 庶家宗遠に
其事の事 御月入に阿光の事及死と出たる事
次は海防の事とて海防の事とて海防の事
案及死の後ハ終ラ 御月入の事及死の事
江中の中流に沈め給はれり(此の事) 庶士に於ては
庶家宗遠に事し給は 経渡に曰く
此の事世に事するに未だ知らずして
庶仕形に所感の事件とて傳せんたんに
二事かんとし一は古今に事するに
たりの人の事し人者能く知る事とて

後海防卷之三終



Handwritten text in a cursive script, likely a form or document, written vertically on the right page of an open book. The text is arranged in approximately 10 columns, reading from right to left. The characters are small and closely spaced, characteristic of traditional East Asian calligraphy.

